

童謡 すゞら

五

父チャン、こわいよ

けれども、良平の心は恐
怖で一ぱいで。もうすべ
てのところか、ちつと立つて
ゐてさへ何だか眼が眩んで
るて、今にも墮ちさうな不
安感に安堵が塞がれるのでした

良平がいきなり父親の胸を、両手で掴んだので、父

「ありや、泣いとるな良平
こうした？」

て来たのを見て驚きまし

良平は泣き聲を出しまし

「これくらいのスペベ、
慣れなくちや駄目ぢやない

や、アベスベ買つてやら
ら。

をくひしばつて滑らうと

萬葉集隨筆

言語信仰

るか、小糸三合もつたら
に行くなといふ譬はいろ
いな理由もあるが、名前

かへることの潔癖さがそ
根底をなしてゐる。子供

必要以上の神經を弄し
ゐる。そして馬鹿らしい

左右するものと考へてゐ
・東京では、ある一部で

（丁）

込んでゐました
父親は、咄嗟にではあるが、良平の恐ろしがる
を利用して、スペベを販
らめさせたことを、すま
いと寂しく考へました。
今日も亦暑くなりさう
朝の太陽が、村道一ぱい
當つて、悲しさうにベタ
を踏み續けてゐる父親の
法師を、長くつきり地
に曳かせてゐるのでした
（丁）

「母性愛の喪失」徳田一家の殘虐さ――。なまじ石城出身者であるので、我々には悚然たるものがある

「大關……」
一關惣吾は食客武士の一人である。ほかに大番頭の三人、東左衛門のうしろにひかへてゐた。かれらの顔にも難色がある。
「は」
「また先夜の二の舞となつたな」
「いえ、今夜は用意があるのですから、よもや……」
「用意? みすゞ袋のなかの者を追ひ出す用意か。飛梅寮でつかまらぬものがどうしてつかまらう。大勢そろつてたつた二人の盜賊が押へられぬ。武藝は役になつたらないものだな」
「一言もない」
『その禮物、見參しよう』
と答へる聲がした
廣 告
天下一品散
桑原商店
磐城名物
靈峰羊羹
小川郷驛前
平屋賣店
『販賣部三處ア』
約特
店
平町ネヅミ坂角
シマス

犯罪都市所轄の平署

送致件數仙台を凌ぐ

旋轉目まぐるしい 惡の萬華鏡

る顧を年一

△：舊盆前後 山口鶴次郎（五）等の毛色の演劇の氣荒な處を見せて

△：公休日の酒盛りから

△：十二月に入つては目

△：遊戯中脛部骨折

△：山本少年寄浴（元）も現れて初秋の夜にふ軍機が墜落して塔架に墜落して

△：ト捜査の手を延ばしてゐる

△：平町二丁目自動車運転手高

△：へられ智識階級の腕力沙汰

△：十七日には忘れもせぬ意越

△：佐市（五）親子三名が協力で

△：十三日「孫代の破藏師相馬

△：インチキ畫家武田玉齊事件

△：佐土監督所の土木助手佐生（西）の浦瓦織物・舉げられ

△：人妻を殺した夜の痴漢は

△：小名濱町十

△：る、鹿島の山道で二十一

△：下

△：山口鶴次郎（五）君を殴つて訴

△：（二）夏井村藤間海岸に海

△：竹春次郎（五）君を殴つて訴

△：（二）夏井村藤間海岸に海

△：（二）夏井村藤間海岸に海